

1982年4月26日浅間山噴火後における同火山 南東斜面水準測量路線の部分再測結果*

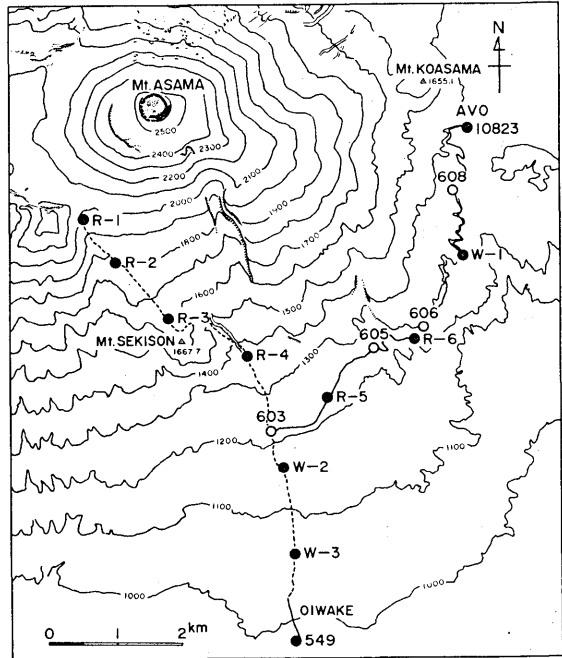
東京大学地震研究所

浅間火山南東斜面の水準測量路線（第1図参照）に関する1981年以前の測量結果については、本会報24号に報告した。同報告に述べたように、第1図中の水準点549（追分西町、標高約979.5m）よりR-1（浅間山南側斜面、標高約1,968.1m）に至る路線においては、1976年～1981年の間に、変動の傾向として、火口を中心とするとみられる沈降を示していることが明らかになった（第2図参照）。

今回の噴火発生後、上記の変動傾向に変化が生じているか否かを知る目的で、部分（水準点R-3よりR-1の区間）的な水準測量を実施した。測量は、1982年5月1日より同月5日の間に行なった。その結果得られた変動値（2重丸）を第2図中に示してある。

同図に明らかなように、水準点R-3に対してR-2、R-1は隆起を生じたとみられる。しかし、この測量結果よりただちに、浅間火山全体として、火口を中心とする隆起の傾向に転じたとは判断するには問題がある。

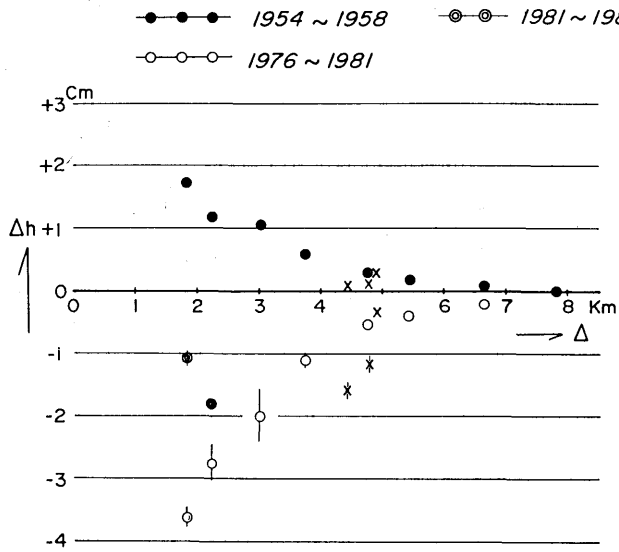
その理由の一つは、1976年～1981年の変動値（第2図中の白丸）に付した縦線は、区間往復測量の結果より計算した観測中等誤差の範囲を示している（R-1については、R-2よりR-1に対しての往復測量値より求めた。同様にR-2についてはR-3よりの往復測量値より……以下同様）。第2図において明らかなように、1982年5月の測量によって得られたR-2のR-3に対する隆起変動は、R-3の1981年測量の誤差範囲内のものである。またR-1のR-2に対する変動は誤差の範囲を越えているが、変動値としては10mm以内である。次に1981年～1982年の間に生じた隆起変動量は、同区間に



第1図 浅間火山南東斜面における精密水準測量路線（1982年現在）

Fig.1 Levelling route of the south-eastern flank of Asama Volcano.

* Received July 5, 1982



第2図 浅間火山南東斜面水準点の期間別変動値（水準点549を不動点として求めてある。△は火口中心より各水準点に対する水平距離を示している。）

Fig.2 Vertical movements of bench marks during the respective periods, referred to BM 549, with the distance from the summit crater.

1976年～1981年の間に生じた沈降変動量を打ち消すまでには至っていない。1976年～1981年の間は浅間山は静穏な状態であった。

以上の2点より考えると、浅間火山南側斜面における変動は、沈降の傾向は止まったと判断されるが、明瞭に隆起傾向に転じたかと断定できない。この変動の傾向を明らかにするには、路線全体についての再測量が必要である。

参 考 文 献

- 1) 東京大学地震研究所(1982): 浅間火山における水準測量。噴火予知連会報, 24, 8-11.